

仕事人秘録

1968年に入学した
金沢美術工芸大学では徹
底した技術指導を受け
た。

入学式直後の課題はいき
なりグレースケールと呼ぶ
色彩トレーニンクだった。
白と黒の濃淡だけで11段階
の色を作成する単純作業の
繰り返しだ。白に黒を少し
ずつ混色して800枚ほど
の紙チップに塗るため時間
がかかる。いやというほど
灰色の種類を見るところか
ら、修業は始まった。

高校の芸術の授業では音
楽を選択していたので、大
学入試の時は中学校以来初
めて絵筆を握った。小學生
のころは図画コンクールで
いつも賞を取っていたこと
もあり、少しの訓練でブラ

未来の予感を形に

⑤

工業デザイナー

川崎 和男氏



川崎氏がデザインを学んだ金沢美術工芸
大学（金沢市）

ひたすら写生し腕磨く

「無理もな
い。こ
の課題を出された。
写生は好きだったこともあ
り、毎日出かけて課題をこ
おそらく
なした。教授からは「デザ
インがよか
い」「なる才能がある」と励
まされた。その後も相変わ
ら

ら無理もな
い。こ
の課題を出された。
写生は好きだったこともあ
り、毎日出かけて課題をこ
おそらく
なした。教授からは「デザ
インがよか
い」「なる才能がある」と励
まされた。その後も相変わ
ら

ンクは取り戻せると思って
いたが甘かった。

入学して最初の夏休み前
に、父が大学から呼び出さ
れた。「今の実技能力では
卒業は難しい」と教授から
告げられたという。父は私
に怒った。医学部を目指す
と言っていた息子が、父の
目には「道楽学校」に映る
美術大学に入った揚げ句、
最初から成績不振なのだか

だろう。そんな私にとつて
金沢美大の実技の厳しさは
格別だった。級友たちが実
技の課題を次々と通過して
いく一方、私はやり直しの
連続。このまま続けられる
のか、真剣に悩んだ。

「これだけ何度もやり直
したのだから、君の技術は
最高だ」。こう励ましてく
れる教授の言葉が私を奮い
立たせた。十分な技術レベ
ルに達するまで繰り返し描
かせる大学教育によって腕
を上げた。
3年生になると実技の能
力は級友たちに引けを取ら
なくなっていた。卒業後の
進路をどうするか考えた
とき、音や光にかかわる装
置のデザインを手掛けたい
と思った。その当時はシン
セサイザーが登場し、ヤマ
ハのエレクトーンや東芝の
オーケストロンが商品化さ
れるなど、電子楽器・オー
ディオ機器の分野に活気が
あった。

オーディオ機器の専門メ
ーカ―は、入社した先輩た
ちをみると音響マニアが集
まる「超オタク」の世界に
思えた。ひとつの製品分野
にそこまでどっぷりつか
る気はなかった。製品デザ
インがまだ洗練されていない
企業の方が若い自分に活躍
の機会を早く与えてくるの
ではないか。そう思って就
職先に選んだのが東芝だっ
た。